

井上家 旧蔵 弘法大師伝絵巻について

宮 次 男

一 はじめに

弘法大師の伝記絵巻は中世特に盛行した。それも同一祖本の伝写による製作であるばかりでなく、系統を異にする数種の絵伝が存在し、更に板本の流布もあって、わが国祖師伝絵巻の中では、特に流通の甚しいものの一つと云うことができる。しかし、遺品に徴してこれをみる時、原初本とみなされる作品は殆んどなく、また現存遺品の製作年代が絵巻物最盛期をやや降る頃のもが大部であるためもあり、更に、一、二の比較的古い年代のもがあつても、所在不明やら、保存状態が良好でないことなど原因して、一般にはさほど注意が払われていなかったことは事実である。これに対して、研究面ではかなりの成果があげられ、「弘法大師傳全集」⁽¹⁾には主要な詞書が全て収録されているのをはじめとして、梅津次郎氏の大師伝絵巻諸本の系統的研究所⁽²⁾の研究は特記すべき業績といわねばならない。本稿はこれらの先学の成果に基づくと多く、ここに改めて敬意と謝意を呈する次第である。

さて、本稿で対象とする井上侯爵家旧蔵の弘法大師伝絵巻は、大正一四

井上家旧蔵弘法大師伝絵巻について

年（一九二五）一月の「井上侯爵家御所藏品入札目録」によると、絵は土佐隆相、詞書は世尊寺經朝の筆ということになっており、「弘法大師在唐繪卷二卷」として録されている。その内容は題名通り、空海在唐中の事蹟を計四段に述べたものであるが、わずかに四段だけでもって、本巻が完結していたとは考えられない。他の例から推察して、数巻乃至十数巻よりなる弘法大師伝絵巻の一部であつたと推定される。また現存二巻の構成法も、これをそのまま原初からのものとすることはできない。それはともかく、本巻は現存する大師伝絵巻の中ではかなりの古様を示す佳品であるので、この紹介を行うとともに、既知の諸本との比較を試み、併せて、本巻の成立時期などの面にふれてみることにしたい。

二 弘法大師伝絵巻の諸本

順序として、今まで知られている弘法大師伝絵巻を系統的に分類してのべる。

高祖大師秘密縁起 一〇巻 第一巻巻首に序文があり、その内容からこの本の成立は空海没（承和二年・八三五）後四百余年を経て製作された

ことがわかる。原本はなく、伝写本であるが京都安楽寿院本が完本として最も古いようで、これは応仁二年（一四六八）河内国交野神尾寺にて清滝寺の蔵本を借り、京都絵所往忠をして写さしめたものであることが各巻奥書及び第一〇巻奥書によって知られる。全六六段よりなっているが、絵は淡彩で、必ずしも入念な作ではない。このほか完本としては、大師伝全集によると京都智積院に慶長年間（一五九六—一六一五）に同山第二世祐宣僧正筆写と伝える一本がある。⁽⁵⁾ また比較的古い伝本として、永仁頃（一二九三—一九八）まで遡り得ると考えられている池田家本一卷（第七巻相当）⁽⁶⁾がある。

高野大師行状図画 六巻 各巻は巻頭に内容目次があり、更に各段の詞書には標題がつけられていて、前記秘密縁起とは体裁を異にしている。ただ第一巻のみは、内題と目次の間に序文が入っている。この序文は秘密縁起の序文と異なる内容で、また各段の詞章も同じではなく、系統を異にすることは明瞭である。その成立年代は、梅津氏の考証⁽⁷⁾によると、第五巻「神泉苑事」にみる「承久逆亂の後、故武州禪門ひそかに此事をかなしみて、ついがきをたかくし、門をかためて、ひさしき雜穢をどどもめられき」の記事から、武州禪門、すなわち北条泰時が仁治三年（一二四二）に死去した後で、しかも神泉苑荒廢をまのあたりに見た作者の年令を考え合わせて、泰時没後ほぼ三十年の経過を想定して、文永頃（一二六四—一七五）に推定されている。原本はなく、高野地藏院蔵の一本が唯一の完本として伝わっている。全五〇段よりなっているが、この内第一巻は模本である。これは天保五年（一八三四）狩野養信が全巻を模写⁽⁸⁾した後、第一巻のみ焼失したので、天保十一年に養信が門人をしてこの写

本から更に模写せしめたものである。

高野大師行状図画 一〇巻 原本は高野惣持院にあったと伝えられているが、現在は伝わらない。伝写本としては、高野親王院本、延暦寺本（応永一四年・一四〇七）、吉野大蔵寺本（延徳二年・一四九〇）、金沢宝集寺本（永正三年・一五〇六）、が完本として知られているが、このほか久保家他分蔵本⁽⁹⁾（応永三年・一四二六）、白鶴美術館本などがある。親王院本の第一〇巻々末及び白鶴美術館本第一巻々首に一〇巻の執筆者名と「繪師金岡末葉左衛門尉光康子息有康 右依爲惣持院重寶輒不可出寺内者也 元應元年己未八月 日」の識語があり、これによって当本は元應元年（一二三二）に製作されていたことを知り、世に元応本とも呼ばれている。全九一段で、第一巻々首に六巻本と同文の序文があり、また各巻初に目次、各段に標題があつて、形式の上では六巻本と同じである。また内容的に云つても六巻本の五〇項目中、四九項目はこの本に含まれており、詞章も同文であつて、結論的に云つて、十巻本は六巻本の増補本であることが梅津氏により立証されている。⁽¹¹⁾ なお、元応本の比較的早期の伝写本に三大寺家旧蔵本⁽¹²⁾があり、この内題には「高野大師行状繪」とあつて、古体を残している。

板本高野大師行状図画 一〇巻⁽¹³⁾ 肉筆本は知られず、板本のみ流布するもので、第一巻巻首に秘密縁起と同文の序文があるほかは、各巻初の目次、各段の標題に多少の相違は認められるが、分段の順序、形式など全く元応本と一致する。絵もまた元応本と殆んど一致するものであるが、詞章は段によって秘密縁起と同文のものがあり、従つてこれら三本の関係は、結論的に云つて、板本は元応本を基礎として製作したが、そ

の或る段の詞書は秘密縁起のそれを参照して改替し、絵はすべて元応本によったということになる。

弘法大師行状絵詞 一二卷⁽¹⁴⁾ 京都教王護国寺に蔵されている絵伝で、この絵巻は先行する諸種の漢文空海伝をはじめ、前述の絵伝を綜合したものである。その成立年代は明らかではないが、京都醍醐寺蔵「大師繪詞」の奥書に

本云已上十二卷漸々令書寫畢近比東寺新書繪詞也以御室御本并所々繪詞取捨云々今度新加之篇目等數箇條在之歟

永和四年九月十八日

弘顯之本

永徳三年癸亥三月廿三日於慈心院閑窓染書了

桑門俊盛

とあることから、永和四年(一三七八)頃に東寺に一二巻本の絵伝があったことを知るが、これが直ちに現蔵本と結びつくかどうかは別として、一応の目安をこの頃に置くことは、絵の様式から云っても可能であろう。なお、「考古画譜」(黒川真頼全集本)では東寺文書及び好古小録の記事を援用して、応安七年(一三七四)より康暦元年(一三七九)に至って製作された弘法大師行状記を現存遺品に相当するものとしている。

三 井上家旧蔵本の主題

井上家旧蔵の弘法大師伝絵巻が、上、下二巻に分かれていることは既に述べたが、最近これに残簡一片を加えて改装を行った。その際、下巻々首にある絵を上巻々末に位置させたが、その理由については後述する。なお、この仕立替えに際して、画面の一部切除により生じた不連続場面を、原初の紙巾にあわせて補填補彩して連続させた箇所がかなりあ

井上家旧蔵弘法大師伝絵巻について

るが、この補填箇所は図版に明示しておいた。

上巻は詞、絵とも二段、下巻は詞二段、絵三段よりなっていた。このうち下巻々首の絵は後述するように上巻第二段の絵に接続すべき場面であるので、今回の改装ではこれの復原を行った。従って、上下合わせて詞と絵各四段が当絵巻の構成であるが、散逸断簡の存在も考えられなくはない。⁽¹⁵⁾ 以下本絵巻の現状について述べる。

上巻第一段は、空海が在唐の間、天竺の靈山に詣で、釈尊の尊容を拝するといふ説話を描いたものである。すなわち、空海は在唐の間、靈山に登り、釈迦如来の真容を拝みたいと常々願っていたが、ある時一人の神童が現われて、空海を靈山へ案内した。先ず、最初の日には神童が大師を背負って白馬に乗り、流沙を渡る。次の日には青羊に乗りうつって葱嶺を越え、第三日目には夜叉神の随う飛ぶ車に乗って靈山の麓に到着した。その時一人の老翁が現われ、空海を見て、「汝の眼に異相あり、さだめて佛を見奉るべし」と云った。時に一個の光を放つ鉢が飛んできて、空海を導き、ついに靈山浄土の釈迦集會に詣でることができた。帰りに、往く時と逆に、飛車、青羊、白馬に乗り継いで唐土の西明寺の古院にもどりついた。この間、わずかに七日間であったという。

絵は、在唐中空海が寓居した西明寺の仏堂に、白馬を伴って渡天をすすめに来た神童と対応する空海、これを奇異なこととして見まもる僧俗の光景から始まり、ついで空海を背負った神童が白馬に乗って岩山の路を疾走するところ。そのあたりには、たいまつをかざして走りくる、赤鬼、青鬼を思わせる異形の者や、虎とも豹ともつかぬ猛獣と唐獅子が岩

かげをさまよっている。山や土坡は尋常のものでなく、黄色乃至褐色の上に群青を重ね、更に墨皴を施した暗色のトーンで表現され、遠山の頂が灰色の霞の上に聳えているのも、流沙や高峻な葱嶺を暗示するものである。次に灰色の霞を隔て斑点のある青羊に乗って疾駆する空海が現れ、続いて飛車の側で待機する緑、赤、橙の身色をした三夜叉神。更に、空海を乗せて空高く飛行する飛車と、これに随って疾走する二夜叉神（原初にあつては三夜叉神が随行したと考えられるが、画面の一部がここで切除されているので、一人はそれに伴って除去されたとみなされる）が小さく描かれ、次は地上で、飛行を終えた飛車が樹下に置かれ、その傍に三夜叉神が休息している。この空海の渡天行程は一気に描き出されていて、本巻中一つの見せ場となっている。なお最後の図は、詞書にみるように、空海の帰路を待つ飛車と三夜叉神と考えてよいであろう。

本巻の最近における改装以前の第一段の絵はここにて終っていたが、この段の場合、以上見てきた通り詞書の内容を殆んど逐語的に絵画化しているのであつて、当然このあとにも図があつたことが予想される。他の大師伝絵を参照すると、これに続いて詞書にある通り、老翁と空海が出合うところ、飛鉢を追う空海、靈山で釈迦の集會に詣でる空海の三場面が少なくともある筈である。このように予想していたところ、幸にもこのうち最後の場面が断簡となつて、掛幅に仕立てられていたので、このたび当巻に復原されることになつた。すなわち、宝樹を左右の後方にたてて、蓮台上に坐す釈迦三尊と、その前向つて右側に三菩薩⁽¹⁶⁾、左側に五人の僧形を配し、釈迦の前に空海が坐して合掌礼拝する図様である。

なお、本巻の絵は、この段にかぎらず、図版に明示した紙断ぎと補填

箇所をみてわかるように、或る時期に何かの理由で部分的に除去した箇所がかなり多くある。しかし、基本的な紙巾（約五〇×五五センチ）から推定して、不連続個所に補紙を挿入して連続させると、あまり長くは欠出してないようで、情景として一区劃をなす場面が逸脱しているところは別として、他は当初の図相内容を考える上に、さして支障をきたす程のものではないようである。

第二段は空海が恵果にめぐりあう条と、修因僧都が護法を遣つて受法を盗聴させる条である。すなわち、唐の貞元廿一年二月十一日に遣唐大使賀能が帰国したが、橘逸勢と空海は唐土に留り、学問を続けることとなつた。空海は良師をもとめたところ、青竜寺の恵果和尚のことを伝えきいて、宿舎の西明寺の僧五、六人とともに恵果のもとをたずねた。恵果はすでに空海の来訪することを予知していて、待ち遠しく思つていたので大層喜び、「すみやかに香花をそなへて灌頂の壇に入べし」と語つた。

ところが、南都の山階寺に修因僧都という後年空海のライバルになつた僧がいて、空海が渡海求法した際、護法を日本から遣して、その受法を盗聴させたのである。恵果より金剛界の大法を受けた時にはこれを聴かれて修因に告げられたが、胎藏界の受法の際には盗法の者が居るといふので結界したため、護法は近づくことができなかつた。以上二つの内容に第二段は分れている。

絵は前半の空海と恵果の対面場面はなく、後半の修因の護法に伝法が盗聴されているところから描かれている。すなわち、前庭に小川が流れ、

草花が美しく咲く庭に向って建てられた仏堂で、恵果から金剛界の大法を伝授されている空海の敬虔な姿と、空海の後側、御簾を隔てて、建物の基壇の石畳に坐りこむ鬼形の護法が表わされて、これが受法盗聴の場面であることを示している。この建物の別室には五人の僧がおり、また室内の障子には水墨風の樹石が描かれていて、建物自体の華麗な色彩とともに、これが唐土を舞台とした内容であることを物語っている。しかし、庭にある松や石組などは、緑青と群青を基調として表わされて、その形態も、「玄奘三蔵絵」などにみる奇怪なものではなく、純日本的な庭園のそれを思わせるものである。

改装前下巻々首の絵は詞書内容から云っても、前述の伝法盗聴図に連続すると考えられる図様で、たとえその間につなぎの場面が介在していたとしても、両図は同段の絵として扱うべきである。すなわち、前図にひきつづいて、これは、空海が恵果から胎藏界の大法を伝授される時、

盗法の者がいることを知って、これを防ぐため結果したので、修因が遣した護法はこの場

挿図1 墨絵の襖（上巻第二段）

に近づくことができなかつたという条の絵である。前図と殆んど同じ構図で、建物の軒近くに机を隔てて恵果と空海が対坐し、護法は流れにかけた橋の手前で、手をかざして無念そうにこれを遠望している。建物の形と前庭の有様は前図と見間違える程似ているが、建物の内部は多少異なって表現している。障子の絵は図様が一層明瞭になっていて、樹石を基にして構図した墨絵であることがよくわかり、また前図では受法の部屋が階段に面した正面一ぱいに広くとられていたが、この図では軒に御簾のたれている部分から仕切られ、そこに間仕切りの障子が入って、前図の半分の大きさの部屋になっている。仕切りの障子は正面から描かれ、松に竹石をあしらった図様の墨絵であることがはっきりと観取される。当時の唐絵撮取の一面がうかがえてまことに興味深い（挿図1）。

下巻第一段は灌頂入壇とその後の齋会の有様をのべた段である。空海は貞元廿一年六月上旬に胎藏界、七月上旬に金剛界、八月上旬に伝法阿闍梨位の灌頂をそれぞれ受け、最後の日に、五百の衆僧に齋供をもうけて飲食を施した。詞書にはこの後に、空海受法灌頂の意義について長々と書かれているが、画題となるべき内容ではない。

絵は筵道を進んで登壇する恵果、空海らの行列で、法螺貝を吹く二僧を先頭に二列に衆僧がつづき、持幡の二童子、天蓋をかけられた下で柄香炉を手にした恵果、灌頂用具をもった僧の列、そして最後に空海が柄香炉を持って進んで行く。灌頂の行われる仏殿は、霞と内部にはりめぐらされた幕にさえぎられてその内は明らかでない。正面階段の近くには数人の庶民がこの行列を見物していて、互にささやき合っている。

この灌頂の建物の裏手、塀を隔てて齋会の調理場があり、多くの人々が料理をしたり、出来上った食物を隣りの会場に運んだりする光景が暢達した筆致と、鮮明な色彩で活き活きと描き出されている。齋会の大会場は、吹抜屋台の手法で鳥瞰的に表わされ、衆僧は思い思いの恰好で食事を取り、その顔は練達した運筆で、まことに表情豊かに描き出されている。会場の奥には一段高くなった壇があり、その上で更に四方に幕をたらし一劃（図では幕はすでに四隅にたばねられている）で、椅子に坐す老僧が供養をうけている。花瓶や、食膳がその前に置かれ、更に壇の前には香炉、受け皿に乗せられた一对の水瓶などの法具があり、これらによって、この老僧は空海に灌頂を受けた恵果その人とみられる。入壇の行列からこの供養図まで、連続構図の中に描出したこの段は、本巻中最も活趣にあふれた場面である。

第二段は、珍賀の受法妨害に因む段で、珍賀という、恵果の相弟子順眺の弟子にあたる僧が、門徒でもない空海に密教の奥義を伝授したことに ついて恵果を諫めたが、その夜、四天王が珍賀の夢に現れて、珍賀を様々に調伏したという説話である。

絵は脇息にもたれて眠っている珍賀を四天王が弓矢や鉞、劔で責めつけている図である。この場面の四天王は他に比べて色彩が淡く、その上緻密度において欠け、やや朦朧としている。これは一見別筆のようにみられるが、夢の情景を表現するために意識的に描きわけたとみれば、他とやや異なる描法がとられているのも理解されよう。

他の大師伝記や絵伝をみると、この説話につづけて、珍賀が自分の非

を悟って翌朝空海に謝罪することが述べてあり、絵もまたその情景が四天王調伏の光景に接続して描かれている。本巻の場合、珍賀謝罪の条が当初からこの段に入っていないことは、詞書末尾の余白の状態から明白である（図版V参照）。恐らく、これに続いて珍賀が謝罪することをべた段が独立してあったのであろう⁽¹⁸⁾。

以上が井上家旧蔵本のあらましである。詞書及び絵の詳細については附載及び図版、挿図等を参照されたい。

四 他本との比較（詞）

次に、この絵伝と現在流布している諸本との関係について考えてみたい。すでに述べたように、梅津氏の研究によって、諸本の系統的整理はつけられている。そこで先述した秘密縁起、六巻本、十巻本、板本、十巻本の五系統から本絵巻の内容に相当する段を選び出して、これらとの比較を行うことから始める。

先ず、詞書について比べると、上巻第一段「大師在唐のあいた……この事法道和尚の記に見たり」つまり空海が在唐中渡天して釈迦の真容を拝した条は、秘密縁起、十二巻本にはなく、他の三本は本巻とほぼ同文で、いずれも「渡天禮拜釋尊事」と題され、第三巻第一段に位置している。六巻本と十巻本とは公刊に際し校合したが、その結果、多少語句の相違をみいだした（附載参照）。しかし、これらの相違は本巻と両本とを全く別種のものに見做す程異質的でなく、伝写時における写し誤り乃至写し落としとみるべき性質のものである。そして本絵巻と、六巻本十巻本とが相違する箇所はそれぞれ殆んど一致しており、この事は他の

段についても同様である。六巻本→十巻本の系譜があとづけられている以上、これはむしろ当然の結果であろう。また六巻本乃至板本には各段にそれぞれ標題が書かれているが、本巻にはそれが無く、直に詞書本文が書かれている。これは現状の詞書初行の前にある余白から推測して、当初から標題は無かったと考えて間違いないようである。なお、内容的に云って、本絵巻の現存四段に関するかぎりは、六巻本と十巻本との項目数が同数であり、従って、六巻本に無くて十巻本のみあると云う段は存在しない。

第二段は前述のように前半と後半に分かれている。前半「唐の貞元廿一年……灌頂の壇に入へしとのたまひき」の恵果と空海が対面する条は、内容的に云って前記の五本にはみなあり、秘密縁起では「西明留在」(第四巻第二段)、「青龍拜謁」(同第三段)の二段に分れている。しかし、詞書の文章は六巻本、十巻本の第三巻第二段「大師御入壇事」の前半にほぼ一致し、秘密縁起及びこれと同文の板本「大師御入壇事」(第三巻第二段前半)とは別種である。

第二段後半「しかるに南京の山階寺に修因僧都……護法もちかつく事多すなりにけり」の修因が護法を派遣して伝法を盗聴させる段は秘密縁起にはなく、他の四本にはそれぞれあるが、本巻の詞書とほぼ一致するのは六巻本、十巻本、板本で、これらの第三巻第四段「守敏遣護法事」に相当する。ただ六巻本、十巻本は詞書中に二度書かれているこの山階寺の僧の名前を、守敏と修因と二通りに書いており、混同がみられ(附載参照)、十巻本と秘密縁起により再編集した板本は守敏で通している。

井上家旧藏弘法大師伝絵巻について

一方、この説話の祖本と考えられる本朝神仙伝は修因であり、従って、修因で一貫している本絵巻の方がより原型に近い趣が強い。しかし、本巻では金剛界の伝法は盗聴されたが胎藏界は防いだとのべているが、他本はいずれも逆で、胎藏界が盗聴され、金剛界は結界して防いだとある。また本朝神仙伝も胎藏界を盗聴されたと説いているので、本巻の方が間違つて書かれたとみる方が穏当のようである。

なお、この段の詞書における前半と後半の行文の続き方は改行されてはいるが、同一紙上に書かれており、当初からこのような構成であったことは明らかで、後世の改竄乃至錯簡は考えられない(図版IV参照)。

下巻第一段「大師本院にかへりて……大師の傳法弘通にあるものなり」は空海が灌頂入壇する段である。この内容は秘密縁起では「青龍灌頂」(第四巻第四段)として一段をたてているが、他本は前記上巻第二段の前半に直結する詞として扱われている。本絵伝と詞書のほぼ一致するものは前段同様、六巻本と十巻本であるが、しかし、この両本では「東寺の一家大師の御流につきて諸家にすぐれたる事、十種の殊勝ありといへり」の次に十種の殊勝(一灌頂殊勝、二受學殊勝、三梵文殊勝、四相承殊勝、五則殊勝、六寶珠殊勝、七道具殊勝、八入定殊勝、九法外護殊勝)をすべて記載しているが、本巻ではそれが除かれている。それはともかくとして、要するに六巻本、十巻本の「大師御入壇事」が内容的に「恵果拜謁」と「灌頂入壇」とに二分され、前者に「守敏遣護法事」が合せられ、後者が独立して一段となったのが本絵巻の形である。この分段法は、修因(守敏)説話の挿入はないが、秘密縁起が「青龍拜謁」と「青龍灌頂」に分割しているのに類似するもので、注目すべきで

ある。

第二段「惠果和尚の御あひ弟子に……四天王きたりてさまざま降伏し給と見る」は珍賀の伝法妨害をのべたもので、五本ともこれを収録しているが、本巻と詞章の同じなものは六巻本と十巻本で、共に「珍賀怨念事」(第三卷第三段)と標記されている。なお秘密縁起と板本は同文とみなされ、秘密縁起は巻が改つて第五卷第一段に置かれている。この段の内容で、本巻のみ珍賀の謝罪の条がないことは既述の通りであるが、これは本巻の構成上見逃すことのできない特長である。

以上、井上家旧蔵本と他本との詞書内容を比較してきたが、これを表に示すとその関係は明瞭となる(表一)。すなわち、内容的には六巻本、十巻

表一 井上家旧蔵本詞書分段と他本との比較

井上家旧蔵本	秘密縁起	六巻本	十巻本	板本	十二巻本
一 大師在唐……(48行) 法道和尚の記に見たり	(無)	○渡天札拜釈尊事 III-1	○同上	○同上	(無)
二 唐の貞元廿一年……(18行) 灌頂の壇に入へしと のたまひき しかるに南京の…… (10行) ちかつく事急すなり にけり	(西明留在) IV-2 (青竜拜謁) IV-3	○大師御入壇事 (前半) III-2	○同上	○同上	(青竜受法) (前半) III-5
三 大師本院にかへりて ……(44行) 伝法弘通にあるもの なり	(青竜灌頂) IV-4	○大師御入壇事 (後半) III-2	○同上	○同上	(青竜受法) (後半) III-5
四 惠果和尚の……(9行) 降伏し給と見る	(珍賀怨念) V-1	○珍賀怨念事 III-3	○同上	○同上	(珍賀懺謝) IV-1

○印は井上家旧蔵本とは同文の詞書
○内標題は「大師伝全集」による
○標題横の数字は巻、段を示す

本の第三卷第一段―第四段が本絵伝にみる主題であり、その詞章も両本とほぼ同じで、同一原典によつたものと考えられるが、本巻の各段には標題がなく、また分段の方法及び順序がこれらと全く異なっていることが知られる。これらの相違は、大師絵伝中に、更にもう一つの系統があつたことを予測せしめるものである。なお、六巻本の第三卷は八段よりなつていて、その標題は前出の四段につづいて、道具相伝事、惠果御入滅事、惠果影現事、大師擲三鉢事の四段があり、十巻本の方は更に着岸上表事が附加されて九段となっている。しかし、三大寺家旧蔵本にはこの段はない。

五 他本との比較(絵)

本絵巻の絵の図様と他本のそれとの異同について比較検討してみると、

一 渡天札拜釈尊の段 秘密縁起と十二巻本にはこの段はない。最初の神童と空海の出会い、本巻では西明寺であり、他本ではいずれも野原のような戸外である。第一の乗物である白馬については、本巻は神童が空海を背負つて馬に乗る姿で表わされているが、他本はいずれも神童の後に空海が同乗する姿となっている。次の青羊では、本巻は空海が一人青羊に乗つた姿で表現されているが、他本はみな神童と空海が同乗している。最後の飛車では、本巻には飛行の前後に地上の飛車が描かれている。計三度表現されており、またこれに従う夜叉神も各三人であるが、他本では飛行中の飛車だけであり、夜叉神も一人のみである(挿図2参照)。

挿図2 天竺に渡る空海

三大寺家旧蔵

次に本巻の逸脱箇所である空海と老翁の出会いについて、ついでにのべると、空海と老翁の対面と、飛鉢を追う空海とを分けて描いたものには、管見では六巻本、三大寺家旧蔵本、白鶴美術館本があり、他の十巻本、板本は老翁と空海が対面している上空に飛鉢があつて、飛鉢を追う空海は描かれていない。これは恐らく転写中に省略されていたものと考えられる。従つて、これを分けて描いたものは比較的原初の形を伝えたものとしてよいであろう（挿図2参照）。

最後の釈迦の集會に参ずる空海を描いた部分では、本巻は比較的簡略な図様であるが、六巻本、三大寺家旧蔵本は釈迦を圍繞する聖

衆が多数⁽²³⁾であり、またこれ以外の流布本、板本はその構成もほぼ一定している⁽²⁴⁾。

最後にこの段を全体としてみると、本巻の場合、白馬に乗る神童と、その背に負われる空海の図様は詞書に「神童大師を負たてまつりてこの馬にのる……」とあるのを忠実に描き出している。次の青羊に乗る時は他本はみな神童と空海が同乗する形をとり、本巻は空海のみが乗っている図柄であるが、詞書は「又これのりうつり……」とあるだけで、飛車の場合の「これにのりうつりて……」と大差ない。従つて、他本では飛車の場合、空海が乗るだけであったことを考え合せて、本巻の青羊の場合も、この詞書の内容からだけで

挿図3 流沙を行く玄奘（玄奘三蔵絵巻二）

大阪 藤田美術館蔵

三大寺家旧蔵

は空海のみが乗った図
 様となっていて何の
 矛盾もないわけであ
 る。また、流沙、葱嶺
 の間に鬼神や猛獸を配
 することは、玄奘三蔵
 絵⁽²⁵⁾でも行なわれている
 ところであり(挿図3)、
 西域的雰囲気を出すた
 めには必要な舞台構成
 であったと考えられ
 る。更に飛車が三度描
 かれていることも、詞
 書を忠実に表現してい
 るのであって、「その
 後にとぶくるまあり、
 夜叉神これにそへり、
 これにのりうつりて、
 すなはち靈山のふもと
 にいたりぬ」と書かれ
 ているのを逐語的に表
 現したものである。そ
 して、最後の飛車は詞

書に「かへる時、さきのご
 とく飛車、青羊、白馬にの
 りて……」と書かれて、往
 く時の逆順で帰ったことを
 示しているから、靈山に参
 詣する空海を待っている飛
 車と夜叉神とみるべきであ
 る。あたかも、貴人の邸宅
 を描いた場面に、その門外
 にそこを訪れた主人を待つ
 牛車が置かれているのと同
 様に解釈すべきであろう。
 このようにみていると、本
 巻の此段の絵は、逸脱部分
 は別として、詞書を忠実に
 絵画化し、更に説話の本筋
 とはあまり関係ない添景を
 豊富に入れて長大な場面を
 とっているのであって、こ
 のような画面の構成は絵巻
 としてはあまり転写を経な
 い比較的原初的な形態をも
 つものと考えられるもので

挿図4 恵果 拝 謁

挿図5 護 法 盜 聴

和歌山 地藏院蔵

ある。

二 惠果拜謁と修因護法の段 前者は本巻では描かれていない。これを描いたものは秘密縁起(第四卷第三段)と三大寺家旧蔵本及び十二巻本であるが、詞書の分段がこれらと本巻とはやや異なっているのであって前述のように、惠果拜謁は六巻本、十巻本の「大師御入壇事」の前半に含まれているから、三大寺家旧蔵本ではこの灌頂入壇の段の最初に描かれている(挿図4)。

さて、修因遣護法の段は秘密縁起にはない。本巻では二度にわたって殆んど同じ構図で惠果が空海に伝法する場面が描かれているが、他本では棟を接した建物、或は同堂別室⁽²⁶⁾にて授法する惠果と空海が描かれている。更に本巻では護法が鬼形で二度とも表現されているが、他本で鬼形に表現されているのは三大寺家旧蔵本と十二巻本で、他はいずれも頭巾をかぶった異相の者である(挿図5)。また六巻本、十二巻本は後の場面、すなわち結界の後でも護法は描かれているが、十巻本(但し白鶴美術館本を除く)、板本はこれが描かれていない。このようにこの段は護法の表現法、その描かれる頻度に相違をみるが、共に十巻本系でありながら、三大寺家旧蔵本の護法が鬼形で表現されていること、及び、白鶴美術館本は二度描かれていることなど、遺品によっては他と異なる点があることは注意すべきである。

それはさておき、この段で本巻と他本との著るしい相違は画面の構成法にある。すなわち、二場面とも小川の流れる前庭を置いて、斜向に伝法の建物を描き、第一の場面では階段を上った所に授法盗聴の護法を置

き、第二の場面では小川から内へは近づくことができず、無念がる護法を描いているが、その構図は殆んど同じであって、同一構図の場面をくりかえし続けて描いている。これに對し他本の場合はいずれも同一構図内における異時場面、つまり異時同図の方法で表現されている。この両者の違いには根本的差異が認められよう。絵巻における同一構図の反復描写は何ら異とするに足らぬのであって、比較的製作年代の早い作品にはしばしばみられるところである。

三 灌頂入壇と齋会 この段は入壇の行列と齋会の場面に二分される。第一の場面では、本巻は筵道の上を、天蓋をかけられて歩く惠果を中にして、その前後にそれぞれ楽器や灌頂の法具をもった衆僧が描かれ、空海は行列の最後に従う。他本をみると、この行列の描かれていないの三大寺家旧蔵本と十二巻本とがあり、これらはその代りに青竜寺における惠果拜謁の光景が描かれている。また筵道の敷かれているのは秘密縁起だけで、他はいずれもただの地面となっている。更に、惠果を中にして、その前後に衆僧を配し、行列の最後に空海を置く構成法をとるのは秘密縁起(挿図6)のみで、他は全て前方にのみ衆僧を置いて、天蓋下の惠果と、これにより添う空海が行列の最後を歩く形をとっている。また六巻本と白鶴美術館本は空海が描かれていない(挿図7参照)。

第二の齋会の場面のあるのは、管見では、三大寺家旧蔵本と十二巻本で、他の諸本にはみられない。画面としてはなかなか変化に富んで面白い場面であるが、どうしたわけか殆んどの本はこの光景を描いていない。この意味からも、本巻の此段はまことに興味がひかれるし、また三大寺

家旧蔵本の存在も改めて注目すべきである。なお齋会の場面と考えられる掛幅の

残簡が国華一三四号（明治三四年七月）に福岡孝弟氏蔵として紹介されているが、これが如何なる本の残簡か明らかでないのはまことに残念である。

本巻ではこの齋会の場面につづいて、同じ建物の奥の壇上で恵果を供養している場面があるが、三大寺家旧蔵本では別の建物で恵果を供養する空海が描かれており、十二巻本では食事する衆僧の真中に、幕を四方にたれた壇が描かれている。それはともかく、本巻のこの段は、入壇の行列から恵果供養の場面まで、まことに長大なスペースをとって、前述の渡天の段

に匹敵する一つの見せ場となっている。

四 珍賀怨念の段 脇息

にもたれて眠っている珍賀を四天王が四方より攻撃している図であるが、他本では脇息にもたれるのでなく仰臥、横臥、或は伏臥の姿勢の珍賀に表わされ（表二参照）、更に秘密縁起と十二巻本では四天王の内二天しか描かれていない。この両本は詞書から云っても、本巻とは別種のものであるが、本巻と同文の詞書をもつ六巻本や十巻本が、いずれも横に寝ている珍賀であるのに本巻のみ脇息によりかかっていることは、この場面だけで一段をなしていることと共に、本絵巻の特色である。すなわち他本で

挿図6 入壇の行列（秘密縁起）

京都 安楽寿院蔵

挿図7 入壇の行列

兵庫 白鶴美術館蔵

表二 井上家旧蔵本と他本との画面対比

井上家旧蔵本	秘密縁起	六巻本	十巻本(三大寺本)	十巻本(流布本)	板本	十二巻本	
<p>一(1)西明寺の空海の所へ神童来る、白馬その後により</p> <p>(2)神童空海を背負い白馬を走らす、鬼形猛獸徘徊す</p> <p>(3)空海青羊に乗る</p> <p>(4)飛車と三夜叉神待機す</p> <p>(5)空海飛車で飛行、一(三)夜叉神随走</p> <p>(6)飛車と三夜叉神休息(圖欠)</p> <p>(7)釈迦を拝す空海、釈迦三尊の他に三菩薩、五僧形</p>	(この段無し)	<p>(1)空海と神童の対面</p> <p>(2)神童、空海白馬に同乗</p> <p>(3)神童、空海青羊に同乗</p> <p>(4)空海飛車で飛行、一夜叉神随走</p> <p>(5)空海と老翁の対面</p> <p>(6)飛鉢を追う空海</p> <p>(7)釈迦を拝す空海、聖衆多教圍繞</p>	<p>(1)胎藏界の受法、頭巾異相の護法盜聴</p> <p>(2)別棟にて金剛界受法護法近す</p>	<p>(1)胎藏界の受法、鬼形護法盜聴</p> <p>(2)同堂別室にて金剛界受法(護法なし)</p>	<p>(1)同上、但し護法は頭巾の異相者</p> <p>(2)同上(護法なし)</p>	<p>(1)同上</p> <p>(2)同上</p>	(この段無し)
<p>二(1)金剛界の受法 鬼形護法盜聴</p> <p>(2)胎藏界の受法 鬼形護法近す</p>	<p>(1)帰朝の大使と空海離別 (IV-2)</p> <p>(2)青竜寺で恵果に拝謁 (IV-3)</p> <p>(護法の段なし)</p>	<p>(1)胎藏界の受法、頭巾異相の護法盜聴</p> <p>(2)別棟にて金剛界受法護法近す</p>	<p>(1)胎藏界の受法、鬼形護法盜聴</p> <p>(2)同堂別室にて金剛界受法(護法なし)</p>	<p>(1)同上、但し護法は頭巾の異相者</p> <p>(2)同上(護法なし)</p>	<p>(1)同上</p> <p>(2)同上</p>	<p>(1)胎藏界の受法、鬼形護法盜聴</p> <p>(2)同堂別室にて金剛界受法、火焰とりまき護法退散</p>	
<p>三(1)筵道を進んで登壇する恵果、その後に来僧、空海は最後尾にあり</p> <p>(2)齋会の調理場</p> <p>(3)齋会の会場</p> <p>(4)同堂にて恵果供養</p>	<p>(1)青竜寺門前の賑い</p> <p>(2)筵道の上を恵果を中に進む行列、空海は最後尾 (齋会なし)</p> <p>(IV-4)</p>	<p>(1)恵果入壇の行列、前方のみ衆僧行進、空海なし (齋会なし)</p> <p>(III-2)</p>	<p>(1)恵果に拝謁する空海(行列なし)</p> <p>(2)齋会の調理場</p> <p>(3)齋会の会場</p> <p>(4)別棟にて恵果供養</p> <p>(III-2)</p>	<p>(1)入壇行列、恵果、空海並び、その前に衆僧進行 (齋会なし)</p> <p>(III-2)</p>	<p>(1)同上</p> <p>(III-2)</p>	<p>(1)恵果に謁する空海</p> <p>(2)灌頂の仏殿</p> <p>(3)齋会の調理場</p> <p>(4)齋会の会場</p> <p>(III-5)</p>	
<p>四(1)脇息による珍賀を四天王降伏</p>	<p>(1)横臥の珍賀を雲上の二天降伏</p> <p>(2)恵果に懺謝する珍賀廊に童子靴を前に坐す</p> <p>(V-1)</p>	<p>(1)伏臥の珍賀を四天王降伏</p> <p>(2)別堂で恵果(童子侍立)空海に謝する珍賀</p> <p>(III-3)</p>	<p>(1)仰臥する珍賀を四天王降伏</p> <p>(2)別堂で空海に謝する珍賀</p> <p>(III-3)</p>	<p>(1)横臥の珍賀を四天王降伏</p> <p>(2)別堂で恵果(童子侍立)空海に謝す珍賀</p> <p>(III-3)</p>	<p>(1)伏臥の珍賀を四天王降伏</p> <p>(2)同上</p> <p>(III-3)</p>	<p>(1)珍賀、恵果に諫言</p> <p>(2)伏臥の珍賀を二天降伏</p> <p>(3)珍賀空海に謝る(別棟)</p> <p>(IV-1)</p>	

井上家旧蔵弘法大師伝絵巻について

和歌山 地藏院藏

挿図8 珍 賀 懺 謝

は翌朝珍賀が惠果と空海に懺謝する場面が連続的に描かれているのであって、(挿図8)一段二場面になっている(但し十二巻本は四天王調伏の図の前に珍賀が惠果に諫言する場面があり、三場面となる)。本巻にあっては前述のように、詞書にもこの懺謝の記事はないから、当然この場面が連続する筈はない。これは他本の「大師御入壇事」が二分され、その前半に修因の護法の条がつけられているのと同様に、本巻独自の分段法と云うべきであろう。なお、珍賀懺謝の場面はこの段の次に存在していたと考えられるが、現在その所在は明らかでない。

以上、本絵巻と他本との相違を、画面構成、主題な

どについて比較してきたが、結論として、画面のみについて云えば、他のいずれの本とも別種の製作になることが推測される。そして、詞書文章が本巻と同類である六巻本や十巻本の絵の主題を殆んどすべて含んでいることは無視することができない。いま、これを整理すると表二のようになる。なお、本巻と他本とは分段や、順序に相違があるので、他本の場合はいずれも本巻相当場面に對比記入し、それぞれの巻次、段数を書き入れた。

六 成立時期の推定

では本巻の内容の成立は何時頃になるであろうか。この問題は詞書に関するかぎりでは、本巻と六巻本とが類似するところから、六巻本の成立時期と共通する問題となる。⁽²⁸⁾

六巻本の成立時期については、すでに梅津次郎氏が、専らその詞書内容からこれを文永頃と推定しておられる。⁽²⁹⁾ 本巻の詞書は僅か四段分しかなく、そのわずかな詞章が六巻本相当部分に殆んど一致するところから、本巻の原初形態の詞章も六巻本と同様であったことは危険かも知れないが、仮りに六巻本と同じであったとすると、梅津氏の方法でもってすれば、六巻本同様文永頃ということになる。しかし、私は本巻の渡天礼拝釈尊の段の末尾に記された「この事法道和尚の記に見たり」という一句を重んじて、六巻本をも含めて、この本の詞章成立時期を考えてみたい。

この空海渡天の説話は、詞書にみる通り、「法道和尚日記」にみるもので、その内容を比較すると、詞書はこの日記を殆んど直訳している

考えられるものである。高楠順次郎編「法道和尚傳考」⁽³⁰⁾によるとこの日記には写本が二本知られており、その一は「御遺跡秘訣實惠僧正口訣 道範増補」と題する高野山無量寿院蔵の鎌倉時代写本と、その二は「離山私記 道範記」と題する高野山正智院蔵の足利時代写本である。この両本の題から考えると、「法道和尚日記」なるものは口訣として成文化されていなかったのが道範によって世に知られることになったように考えられる。これ以前の漢文伝記にこの説話が収載されていない理由もこのためであろう。管見によると漢文伝記での渡天礼拝釈尊の初見は応永年中編纂の政祝編「弘法大師傳抄」であるが、空海渡天を述べたものに明澄尊信房の「南山秘記」があり、寛喜二年(一二三〇)に作られている。その内容は「弘法大師傳全集」の編者も云う通り、奇怪な事多く、信用し難いが、著者明澄は道範の弟子にあたっていたので、この空海渡天に関する内容も、道範より伝えられた説話を敷衍して創作したとも考えられなくはない。そこで、空海が入唐中天竺に渡り、親しく尊釈を拝したという、説話としてまことに興味深い構想が道範あたりから生じていると考えると本巻の成立も、道範以後ということになる。

道範は高野山正智院の学僧で、建長四年(一二五二)の示寂であるが、⁽³¹⁾私はこの道範が本巻の成立にかなりな関係があったのではないかと推測する。六巻本の成立時期の拠点となった「故武州禪門」即ち北条泰時の没年、仁治三年(一二四二)は道範が伝法院不断経の事件に⁽³²⁾連坐して讃州に配流になる前年であり、年代的に云っても何の矛盾もなく、また建保、承久以後の荒廃した神泉苑を泰時がひそかに修理したことなども親しく見聞したであろうことは想像に難くない。更に道範は空海伝に対しても

井上家旧蔵弘法大師伝絵巻について

かなり関心をよせていて、円明房上人、すなわち中川成身院大進上人の「弘法大師略頌」に注を加えて「弘法大師略頌鈔」を文暦元年(一二三四)に著している。もっとも、これは仁和寺二品親王の教命により著したと奥書しているが、空海伝についてはかなりの造詣があったことを知る。道範は前述伝法院事件によって仁治四年(一二四四)から建長元年(一二四九)まで讃岐にあった。この地には空海誕生の聖地と云われる普通寺があり、彼はここに寓居を構えている。私は彼がこの普通寺時代にこの絵詞の詞章を作ったのではないかと考えるものである。そこには何の証拠もないが、詞書内容とは年代的にも矛盾をみないし、空海渡天説話をはじめ、空海伝にかなりな造詣があり、しかもきわめて高い学識のあった道範が、空海ゆかりの地に配流されたことを考え合せるとき、この詞章の作者に彼を結びつける結果になったわけである。「範幸寓居、恢啓講席、誘誨四衆」と本朝高僧伝に記されている如く、恐らく彼はこの地で講席のかたわら、空海の伝記を四衆にわかりやすく話したことであろう。或は絵巻なり、掛幅の伝絵が作られたかも知れない。それはともかく、私は以上のように本絵巻乃至六巻本の祖本の成立を建長頃に想定するものである。絵巻としての画面構成において、本巻が比較的古いスタイルをもっていることもこれを傍証するといえよう。しかし何分にも資料不足で、これを実証することができず残念に思う次第である。

七 製作年代の推定

次に本巻が、先に推定したように建長頃までも遡りうる原初本か、或はその伝写本かという問題がある。形態的にみて、詞書と絵の紙は別で

あつて、絵と同一紙面に詞書が書かれていない。これは一応原本的な性質をもつとみられるが、絶対的なものではない。詞書文章をみると、他本との校合の結果、本巻になくて他本にある語句のなかで、先行の漢文伝等を参照して、明らかに逸脱したと考えられるものが若干ある。これを六巻本で補つて検討を加えると次の如くなる。

詞一の12行目「青羊の(たけ七八尺計)たかさ六七尺なるあり」で、この欠文は他の本にはいずれもあり、この段の祖本と考えられる「法道和尚日記」にも「長七八尺許、高六七尺許」とあつて、内容的に云つてもあつた方がよいように考えられる。

詞二の17行目「報命つきなんとす(法を付とするに人なし汝)ふみやかに香花をそなへ灌頂の壇に入へし」は、「金剛峯寺建立修行縁起」をはじめ殆んどの先行漢文伝は「報命欲竭無人付法、必須速辨香花入灌頂壇」と「無人付法」を記しているから、本巻の場合、これに相当する文章を脱していることは疑ない。

詞二の23行目「金剛界」と25行目「胎藏(界)」は他本とは、その順が逆で、胎藏界が先で、この伝法が盗聴されたことはすでに指摘したが、「本朝神仙伝」でも護法が「纒聞胎藏而還」とあつて、胎藏界の伝受を盗聴されたことをのべている。また灌頂の順も詞三にみるように胎藏界が先である。

詞三の7行目「齋筵にのそみて(悉く)随喜をなす」も漢文伝では「臨齋筵皆悉随喜」とあり、殆んど直訳しているのだから、これも脱字とみてよいであろう。

詞三の40行目「十種の殊勝ありといへり」のあとに他本はみな十種の殊勝を列記している。この箇所の典拠は「真言付法纂要鈔」で、38行目以後は大體これを直訳して詞書としてるのであるが、この「真言付法纂要鈔」には

抑本朝傳真言教家不同而於東寺一家勝於諸家有十種殊勝

一 灌頂殊勝 二 受學殊勝 三 梵文殊勝 四 相承殊勝 五 誓願殊勝
六 寶珠殊勝 七 道具殊勝 八 入定殊勝 九 法則殊勝 十 外護殊勝
とあげて、次に各々の殊勝について詳細に記している。従つて「そのむねつふさにするにあはす彼の文をたつねてしりぬへし」の省略理由も意味をなすのであり、それ故に十種殊勝は本巻にも書き入れらるべきであつたと考えられる。

42行目から43行目にかけて「天下の興復(の大本)國家の安全(の基跡)ひとへに大師の傳法(により真言の)弘通にあるものなり」は、はたして脱文か否か定めがたいが、最後の(により真言の)は、これがないと文意が通らないので、この句はたしかに脱文とみてよいであろう。

詞四の3行目「玉堂寺の僧珍質と云人ありけり(其人大師の御受法を妨と思て申目)日本座主」は諸種の漢文伝が引用している「吳殷纂」によると「玉堂寺僧珍質申云、日本座主設雖聖人非門徒也」とあり、この場合は脱文でなく、むしろ本巻の方がより古体を示すと云える。

以上、詞書にみる脱文を拾つてみたわけであるが、このように脱文、脱字の多い詞書は原初本としては考えられない欠陥をもつものである。恐らく詞書筆者の不注意から生じた失敗と考えられるが、それにしてもこれを原本と看做すよりは伝本と考えた方がより自然であろう。

では、絵の面でもこれと同じことが云えるであろうか。この問題は誠に難問と云わねばならない。

絵巻を製作するにあたっては、それが原初的なものであつても、構図なり、人物の姿態など、先行絵巻から集図、借用する場合がかなり多く行われたらしいことは、信貴山縁起尼公卷の村の女の洗濯場面が、西行物語絵巻や弘安本天神縁起、或は泣不動縁起などに再見するし、また伴大納言絵詞の子供の喧嘩の場面を、松崎天神縁起の社殿造営場面にその変

形をみるなど、遺品に徴しても推測されるところである。従って、たとえそれが原本であっても先行作品や、粉本類よりの移写や集図ということも考えられるから、明らかに伝写されたことと見られる根拠がないかぎり、絵画それ自体から、これを独創的な原本か否かを決定することは困難である。まして、その作品が芸術的にも優れている場合はなおさらで、本巻の場合も直ちにこれを定めがたい。

しかし、本巻の場合、詞書の状態から考えると、伝写本とみるべき要因が多く、詞と絵が別本とは考えられない。また詞書書風や絵の描法の面から云つても、これを建長頃の作品とすることはいささか無理である。

では井上家旧蔵本の製作年代を何時頃におくべきであろうか。これが原初本でないことはすでに述べた通りであるが、伝本という前提にたつて本巻をみる時、その時代判定には自から制約がある。すなわち、これがどの程度原本に忠実であるかどうかを一応考えに入れなければならぬ。構図の面から云えば、その長大な画面構成、同一構図の反復、そして全体にきわめてゆとりのある経営位置などは恐らく原本に比較的忠実であったと考えられるが、しかし、その描法上の特色や、技法などをみる時、これを原本成立時期と考えられる一三世紀の中葉におくことはいささか躊躇せざるを得ない。従つて、本巻の製作年代を想定するにあつては、一応構図については慮外においてかからねばならない。

一般的に云つて、本巻にみるような中国乃至西域を舞台とした絵巻は鎌倉時代になりに作られており、その遺品も、吉備大臣入唐絵詞や、華嚴縁起をはじめとして、祖師伝関係に多く存している。これらの絵巻で

は云うまでもなく、俗体人物はいずれも中国風俗で描出され、建築物も純日本式でなく、中国式をそのまま伝えたものでないにしても、異国的な形体、色調をもって表現され、山容などもかなり意識的に描き分け、更に全体の画風の上からも、日本的題材とは区別されている。その顕著な例が東征伝絵にみる唐土の景物と日本のそれとの描き分けである。本巻に関するかぎり、この区別が行われているかどうか知るよしもないが、本巻にみる画体に比較的近いものを強いて求めるならば、法相宗秘事絵詞の名で知られている玄奘三蔵絵一二巻があげられよう。この絵巻は、高階隆兼筆春日権現験記絵二〇巻との比較により、験記絵の製作された延慶二年(一二三〇)前後に同じく隆兼によって描かれたと推定されている。緻密な描写と鮮明な色調をもち、およそ鎌倉期のやまと絵の技巧をすべて活用しているとみられるものであつて、春日験記絵と共に伝統的なやまと絵様式の一頂点をなすものである。従つて、玄奘三蔵絵と本巻とを比較することは、その製作年代を推定する上に適当な方法と考へるものである。

さて、両者を比べると、建築物や樹法が特に類似していることが気付かれる。尤も、共に異国風の建物であるから、粉本を同じくしていると云えばそれまでであるが(挿図9参照)、東征伝絵とは全く趣を異にするもので、玄奘三蔵絵と本巻とは、鎌倉時代のやまと絵の伝統的様式に基づく同一画系の上にあるように考えられる。更に、本巻の絵三灌頂入壇の場面の灌頂堂脇や、絵四の珍賀降伏の場面にみる闊葉樹は、樹幹が四十八巻本法然絵伝にみるような形式化して誇張されたものでなく、写実性があつて、玄奘絵にみるものにきわめて近い趣がする(挿図10)。しか

にK字形を基本として、のびのびとした高い樹形となっている。

次に人物の表現についてみると、僧形の頭頂が割れた形をした、所謂
 ちり頭が目立つが、それは、信貴山縁起を引用するまでもなく、地
 蔵院本や、白鶴美術館本にもみられ、また、他の絵巻では一遍聖絵（一
 二九九）の一部や、慕帰絵（一三五二）にもみられて、異とするに足らぬ
 が、何の屈託もなく、のびのびと描かれた姿勢や、各人各様に表わされた
 豊かな表情にみる描線は、暢達そのもので、その表現力は素晴らしい。こ
 の種の描線は、信貴山縁起以来の伝統的線描主義が残存するものとみな

挿図9 玄奘三蔵絵の建物と樹木（巻一）

大阪 藤田美術館蔵

し両者の松の
 樹形や描法は
 やや異ってい
 て、本巻のそ
 れは生長をお
 さえてやや萎
 縮した感じの
 ものが多く、
 いわば盆栽的
 な形である
 （挿図11）。こ
 れに対し玄奘
 絵では、この
 種のものであ
 るが、一般的

されよう。これに対
 し、色彩効果の妙は
 描線程發揮されてお
 らず、むしろ従の位
 置で、着衣に施され
 た文様などもあまり
 精緻ではない。一方
 玄奘絵は、描線と色
 彩がほぼ同じ比重で
 もって表わされ、特
 に着衣の文様には精
 緻のかぎりをつくし
 て、工芸的感触すら
 感じられる程であ
 る。しかし、これと
 ても、本巻にみる描
 線と色彩の主従関係
 を歩み寄せ、更に精
 密に描くと、玄奘絵
 にみる人物表現がと
 られることが予想さ
 れるものであって、
 私が本巻を敢て玄奘

挿図11 上巻第一段の松

挿図10 下巻第一段の闊葉樹

三藏絵と比較したのもかかる様式上の発展過程を考えたためである(挿図12・13参照)。

大阪 藤田美術館蔵

挿図12 玄奘三藏絵の人物(巻五)

次に岩皴についてみると、本巻のそれは空海渡天の行程を示すところに顕著な例がみられる。すなわち、黄或は褐色を地色とし、その上に群青を主としながら、これに墨を加えてぼかし風に順次濃淡をつけて表現している(図版1・挿図14)。この種の表現法は、あま

に対し玄奘絵の場合は獣皮の腰衣や肩当をつけ、筋肉の盛り上りをつくまどりで誇張した形

になっている(挿図15参照)。本巻と玄奘絵とを比べると、建物や樹法など、近似する一面はあるが、しかし、ここでのべたように表現法や描法にかなりの相違がみられるところがある。一般的に云って玄奘絵は、精密きわまりないものであるが、それだけに、やや理知的で、硬化した画趣を呈していることは否めない。これに対し、巧拙は別として、本巻には末だかかる硬化現象はみられず、活気に満ち、情感のあふれる趣をなして、見る者にとってはまことに親近感が強く、実に楽しめる画面となっている。この理由の一つには、本巻の登場人物が、可憐と云うか、無邪気と云うか、実にのびのびと、しかも暢達した筆致で描かれているためであるが、更に、その画体に形式化乃至類型化があまりなく、従って自然に、何の抵抗感もなく観賞できるためであ

挿図13 入壇を見る俗形(下巻第一段)

り類例をみないものであって、一遍聖絵や東征伝絵にみる宋元画風の皴法でもなければ、伝統的なやまと絵スタイルでもない。ところで、玄奘絵のそれは、色彩の濃淡による表現ではなく、信貴山縁起以来、親しまれているいわば伝統的な平行弧線による表現法で、それもかなり類型的で、硬化したものであり、しかも甚だ誇張的である。更に、この西域地区にはたいまつを持って走り来る鬼形が描かれているが、本巻では、禪をしめ、手首、足首に輪をつけただけの、ごく普通の鬼形である。これ



挿図14 西城の山容（上巻第一段）

ろう。このような画趣を呈する作品は絵巻の場合、未だ衰退期に入らぬ前と考えられる。私は春

日驗記絵や玄奘三蔵絵に、伝統的なやまと絵の様式を基盤とした鎌倉絵巻の帰着点を見出す者であるが、本絵巻は以上のべた様に、その段階に到達する以前のものである。すなわち、その製作は、本巻が伝本としても、あまり原本から隔たらぬ頃、やや巾を広くみて、十三世紀後半と推定することは可能であろう。

最後に詞書書風について付け加えると、詞二の恵果拜謁、修因遣護法の段と他の三段は書体がやや異っている。しかし、いずれも世尊寺様の書風で、詞二は他よりやや能筆と覚える。詞一、三、四は同筆で、世尊寺様のねばりのある筆癖がよく表われており、この書体に近いものに、玄奘三蔵絵の巻五、六の詞書があげられる。源豊宗氏はこの両巻の詞書筆者について、世尊寺行尹を想定しておられる⁽³³⁾。その理由は、両巻の筆癖が、中田勇次郎氏が行尹筆と推定された法然上人絵伝（四十八巻伝）の

卷四、五、六にきわめて近いと観られたためであるが、私には、この両者が必ずしも同筆とは考えられないので、一応ここでは筆者の推定はさけない。しかし、先にものべたように、本巻の詞書が玄奘絵の詞書に近い書体を示しているところから、本絵巻の製作年代の下限は自ずから限定されてくるであろう

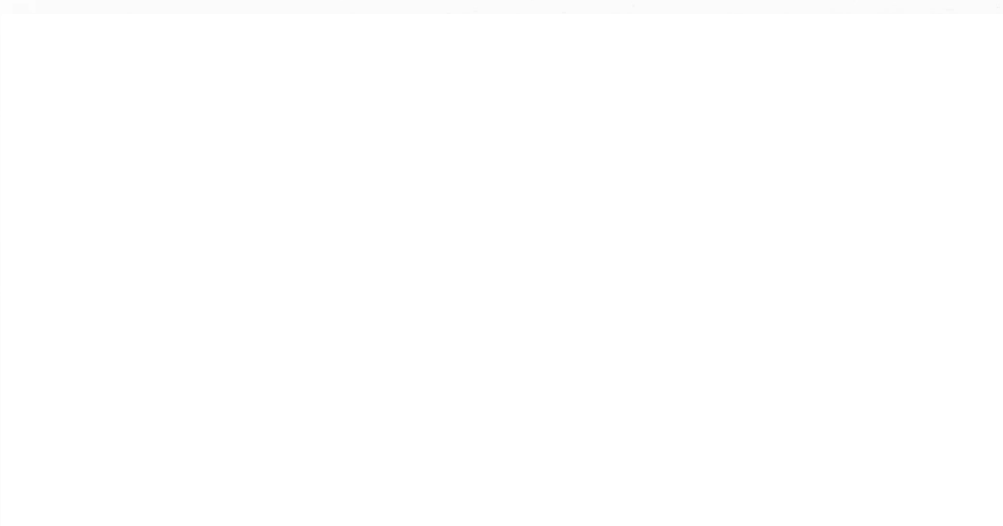
（挿図16・17参照）。

八 今後の問題

大阪 藤田美術館蔵

以上、井上家旧蔵の弘法大師伝絵巻について、他本と比較しながら紹介してきたが、この絵巻が、数ある弘法大師伝絵巻の中での占める位置について、当然ふれなければならぬ問題が残っている。とは云え、わずかに四分のみしか明らかでない本巻をもって、六巻五十段、或は十巻九十一段など大部な絵伝と対決し、かかる大問題

挿図15 西城風景（玄奘三蔵絵巻二）



挿図16 下巻第一段詞書

挿図17 玄奘三蔵絵巻五詞書

を解決することは時期尚早と云わねばならないが、本巻の四段分に関する限りでは、詞最内容は六巻本、十巻本にきわめて深い関係にあることは確かである。しかし、その分段法に独自なところがあり、また、他本にある各段の標題が本巻にはないなど、これらとの直接的な継承関係を明らかにすることはできない。

一方、絵についてみると、本巻の方が、各画面の内容が豊富で、六巻本、十巻本の主題を殆んどすべて含んでいることが注意をひく。また、

井上家旧蔵弘法大師伝絵巻について

画面構成の上からみて、本巻の場合、六巻本に比べて、同じ主題を扱いながらも、きわめてゆとりのある、闊達な情景を展開しているのであって、様式的にみても、本巻のような構図法は六巻本や十巻本のそれよりも古様のように考えられる。これらのことから、本巻を六巻本に先行する一本と考えられなくはないが、十巻本の中でも、三大寺家旧蔵本には齋会の会場があり、また同系本にはみられない空海と恵果の初対面の場があるなど、異色のものもあって、本巻の画面構成が長大で、内容豊富であるからと云って、必ずしも六巻本に先行するとは云い切れない。

従って、本巻の弘法大師伝絵巻の中における位置については、詞書内容ばかりではなく、秘密縁起や六巻本⁽³⁴⁾、更に種々の十巻本における画面の主題、その構成法等、この絵伝諸本の総合的な検討と併せて考究すべきであろう。現在のところこれを行う迄に至っていないので、今後の問題として残したい。ただここで付け加えておきたいことは、仮りに、本巻の原初における詞書の全貌が六巻本或は十巻本と内容の上で一致し、段数においてもあまり変っていないかつたとすると、巻数の上で相当大部なものになるのではないかと云うことである。本巻の全長を合計すると一五二四・四センチあり、これは四段分にすぎない。しかも逸脱箇所を入れると実際には更に長いものとなろう。比較的長尺の三大寺家旧蔵本第三巻をみると、八段で一七五二・二センチあり、本巻より二メートル余りしか長くない。このことから考えると、もし本巻が他本のように一卷が八段乃至九段の構成であるならば、それらの約二倍の長さになり、これでは絵巻としても長すぎるのであって、三大寺家旧蔵本や、本巻の合計にみる程度が一卷分として適当である。従って、六巻本乃至十巻本

と同内容とすればこれらの約二倍の量、即ち、十二卷乃至二十巻で完結していたと推察されるに至る。

しかし、何分にも、資料不足であるので、本巻と一具をなす絵伝の出現をみるまでは確言できないが、要するに、本巻は、六巻本、十巻本と同種とみるよりも、現在知られている弘法大師伝絵巻には類本をみない一本と考える方が、目下のところでは穏当であろう。

註

- 1 全一〇巻 六大新報社発行 昭和一〇年、この内巻八一—一〇に絵伝を収載。
 - 2 a 「池田家藏弘法大師伝絵と高祖大師秘密縁起」美術研究七八（昭和一三年六月）
b 「地藏院本高野大師行状図画」美術研究八三（昭和一三年一月）
c 「東寺本弘法大師絵伝の成立」美術研究八四（昭和一三年一月）
- 以上三論文にて、梅津氏は専ら詞書内容と、その標題から大師伝絵の系統的研究を行っておられる。
- 3 本巻につけられた古筆了仲の極書により詞書は経朝筆と伝えられ、また明治一七年東京博物館の書付により絵は隆相筆と鑒定されたことによる。
 - 4 註2 梅津氏論文による。
 - 5 「弘法大師伝全集」の編者の解説（巻九、三〇三頁）による。但し最近同寺に問合せたところ、在所不明との由。
 - 6 註2 a 参照。
 - 7 註2 b、四九〇頁。
 - 8 現在東京国立博物館蔵の地藏院本の模本がこの時のものと考えられる。
 - 9 同寺に問合せたところ、二、三年前に盗難にあい、未だもどらぬ由。絵は稚拙なものであるという。
 - 10 久保家には巻五、七、八、十の四巻あり、巻十の奥書により、執筆者は空心院住侶善澄、画工は清浄心院住僧道周、願主は金剛手院極少僧都祐實であったことを知る。東京国立文化財研究所開所記念 稀観絵巻物展覧 展示品解説（柳沢孝技官担当分）参照。

- 11 註2 b、四八七—四八九頁。
- 12 梅津次郎氏「高野大師行状絵の零巻について」国華七五二（昭和二九年一月）註2 a 二七一—二七五頁参照。なお「弘法大師伝全集」巻八に絵のみ複製し、その詞書は絵の上部に活字体で印刷したのがある。
- 13 註2 c 参照。
- 14 了仲の極書によると
大師入唐在留之
繪巻物二卷詞書
上ニニケ所 大師在唐のあいた
下ニニケ所 大師本院に
世尊寺三品經朝卿
眞蹟無疑者也
七月 古筆了仲

- 15 了仲の極書によると
大師入唐在留之
繪巻物二卷詞書
上ニニケ所 大師在唐のあいた
下ニニケ所 大師本院に
世尊寺三品經朝卿
眞蹟無疑者也
七月 古筆了仲
- 16 とあり、この「下ニニケ所」というのを詞書の段数とすると、更にもう一段あったことが推測される。また、本文で述べる如く、上巻第一段には散逸場面が予想される。
- 17 この場面の向つて右端の一菩薩は、更に切断されていたものである。
- 18 空海の背後は欠脱の補填部分であるが、この種の行列を示す秘密縁起も空海が最後に位置しているから、本巻の場合も空海の後から行進する者は居なかつたと推定される。
- 19 註15 参照。
- 20 原本には標題なく、「伝全集」による以下同。
- 21 十二巻本では修圓となつており、その他漢文伝では守圓とも書いたのがあつて、中世かなり混同されていたようである。
- 22 大江匡房（一〇四一—一一一一）の著であるから、空海伝としてもかなり古いものである。「大師伝全集」第一全巻目次、及び第一巻一八七頁参照。
- 23 法道和尚日記（大日本仏教全書一一四所収。三〇四頁）によると、青羊の場合も「所置鞍者如前白馬。神童如先乘前葱嶺」とあり、神童も同乗したように記している。
- 24 三大寺家本の場合、釈迦三尊の他に、四菩薩、八天部、十二羅漢、四天王、二王が

井上家旧蔵 弘法大師伝絵巻 寸法表 (単位 cm 補は最近の補紙 (×印は原紙中に合わせて補合した所))

上 卷			下 卷		
天地32,8 (但し上2.0mm, 下に1.0mm) 補強紙を貼込む 全長 857,1			天地32,8 (但し上1.9mm, 下) 2.0mm補強 全長 667,3		
1	詞 I	53.3	1	詞 III	51.2
2		11.5 (0.3 別紙)	2		2.4
3		42.9	3		54.6
4	絵 I	21.5 ×	4	絵 III	7.8 ×
5		1.4 × (補)	5		11.8 × (補)
6		31.2 ×	6		5.4 ×
7		33.3 ×	7		4.0
8		10.1 × (補)	8		25.8
9		11.0 ×	9		30.7
10		53.6 ×	10		23.6
11		0.6 (補)	11		41.1 ×
12		54.3	12		5.5 × (補)
13		10.0 ×	13		9.7 ×
14		3.4 × (補)	14		55.0
15		41.0 ×	15		2.2 × (補)
16		23.4 ×	16		10.6 ×
17		14.4 × (補)	17		0.6 × (補)
18		16.8 ×	18		42.0 ×
19		47.2 ×	19		7.4 ×
20		7.1 × (補)	20		1.0 × (補)
21		18.6 (補)	21		4.8 ×
22		7.7	22		4.0 × (補)
23		44.3	23		21.6 ×
24	詞 II	20.0	24		3.1 × (補)
25		23.1	25		12.5
26		41.4	26		30.6 ×
27	絵 II	50.5	27		0.6 × (補)
28		13.9 ×	28		24.0 ×
29		1.3 × (補)	29		40.5
30		37.9 ×	30	詞 IV	28.3
31		2.2 (補)	31	絵 IV	35.9 ×
32		25.2 ×	32		4.3 × (補)
33		1.3 × (補)	33		14.3
34		27.3 ×	34		50.4
35		0.7 × (補)のり代か			
36		36.9 ×			
37		4.0 × (補)			
38		12.8 ×			

井上家旧蔵弘法大師伝絵巻について

二三

- その構成メンバーである。
- 24 その構成は、釈迦三尊の他に、二菩薩、四天王、宝珠を捧持する一神将、四天王、二王となっている。
- 25 第二卷第二段、及び同第三段。
- 26 六卷本。
- 27 十卷本、板本、十二卷本。
- 28 十卷本についても同様のことが云えるが、十卷本は六卷本の増補本であるから、ここでは六卷本に重きをおいて、この系統の詞章成立時期を考慮することにした。
- 29 前掲美術研究八三号四九〇頁。
- 30 大日本仏教全書一一四、遊方伝叢書第二所載。
- 31 本朝高僧伝巻第一四(大日本仏教全書本)による。
- 32 金剛峯寺と伝法院の確執は久しいものがあるが、仁治二年(一二四一)七月、伝法院不断経のことに關して大いに紛争し、両方の衆徒が乱闘するに至った。そしてついに朝廷及び六波羅に訴えて公裁を請う結果になったが、翌三年九月に公裁が下され、金剛峯寺の法性、道範以下二六名が諸国に配流されることになった。
- 33 角川版日本絵巻物全集一四 玄奘三蔵絵解説 (同書一九頁) 参照。
- 34 真保亨氏の御示教によると久松家蔵の弘法大師伝絵巻の零本一卷は、その殆んどが六卷本と同じでありながら秘密縁起にある応天門額の段があり、六卷本とは別種と考へるべきとの事である。

附 載

井上家旧蔵弘法大師伝絵巻 詞書

原文中、異体文字は現行のものに改めた。改行はすべて原文通りとした。他本との校合は傍記及び注記した。他本の略号は、三一三大家旧蔵本（十巻本）、六一六巻本（地藏院本）。十一十巻本（大蔵寺本）。なお校合においては仮名、漢字の相違は、これを行わなかつた。

大師在唐のあいたつねに靈山にのほりて如來の

眞容をおかみたてまつらむことをねかはせ

給けるにある時一人の神童たちまちにきた

れりそのすかたはなはたあやし世のつねの

人にあらず靈異ありてよく人のおもふところ

をしる大師をすゝめて靈山にまいらせ結へと

いふ大師のたまはく流沙葱嶺のさかしきみち

数万里のあいたをへたてたりいかてかたやすく

いたらんやといふその時に白馬たちまちに

きたるかされる鞍をけり神童大師を負

たてまつりてこの馬にのるとふかことくして流沙を

わたるつきの日青羊のたかさ六七尺なるありさ

きのことく鞍をけり又これにのりうつりて

葱嶺のさかしきをこゆその後にとふくるま

あり夜叉神これにそへりこれにのりうつり

てすなはち靈山のふもとにいたりぬその

時老翁たちまちにいてきたりてなちんはいつ

この人を又いつちへかゆく又なに事をかも

とむるといふ大師こたへ給はくわれ靈鷲山

にのほらんかために支那國よりきたれり

本師釋尊をみたてまつらん事をのそむとの

たまふ老翁のいはく汝眼に異相ありさため

て佛をみたてまつるへしたし佛滅度とし

をへたりたやすく感覺しかたしもほら生佛

不二の觀をなさは蓋障をはらひて色身を

拜せむかといふときに山ひくこと雲中の

雷のことし微風あふきて樹をうこかす地ふる

ふこと水の上のふねにたり香雲たにみて

りたちまちにこの相を見て身心適悦なり

空中に一の躰ありてひかりをはなちてみち

をしめすひかりにしたかひて山頂にのほるに

すなはち本師釋尊の儼然として坐し給

へるを見たてまつる觀音ひたりに坐し

たまひ虚空藏右に坐し給へり八万の居士

〔万二千の聲聞威神嚴肅にして各衆会

につらなる見佛のちからによりてたちまちに

除蓋障三昧をえたまふ如來つけてのたま

はくなんちむかし徳本をうつくいまゝた

値遇せりわか内證の秘密これをまなひて

法をひろめ生を利する事はるかに後佛

の出世につたふへし旋繞禮拜し長跪

合掌してつゝしみてこの教勅をうけ

てさらにやまのふもとにかへる時さき

のことく飛車青羊白馬ありて唐

土西明寺の古院にかへるそのあいた七日

七夜くちに自然の甘露をなめてさらに

飢たる気なしといへりこの事法道和尚の

記に見たり

〔絵〕

唐の貞元廿一季二月十一日大使賀能船をめぐらして歸朝す大師ならひに橘大夫逸勢

とはとまりて學問す大師あまねく城中

の名徳をたつねとふらひたまふに青龍寺

の惠果和尚の御ことをつたへきよて西明寺の

僧志明談勝等の五六人の法師とよもに

和尚の御許にまうて給へり和尚は大興善寺

の不空三藏付法の上足眞言大祖大毗盧(六、十)

遮那如來七代の嫡嗣なり徳はこれ時尊(六、十)

にして道はすなはち帝の師なり三代のみ(三、六、十)

かとこれをたふとひて灌頂をうけ四輩の弟子(給ふ)

これをあふきて密藏を学ふ忽に大師のまい(見)

らせ給たるを御覽して多みをふくみ悦を(て)六、十(三)

なしてのたまはく我さきより汝か來らむする(に)十(へ)き(三)

事を知て相待事ひさしくなれり今日適(傳)三

あひみることを多たりおほきによし(法)三(四)

報命つきなんとす(法)を付とするに人なし汝(六)三(五)

なへ灌頂の壇に入へしとのたまひき(て)三、六、十(六)

しかるに南京の山階寺に修因僧都といふ(守敏)三、六、十

人あり年戒ともにたけて薰修日つもり(けり)三

たりければ事にきて大師の名望をそ(竊に)三、六、十

ねみたてまつり大師渡海求法の問護法(竊に)三、六、十

をつかはして傳法をうかひきかしむ(胎藏界)三、六、十

の大法を傳受したまふ時護法これをき(是に)六、十(七)

修因にかたる大師これをしりて胎藏の(是に)六、十(七)

の大法を受給時は盜法のものありとて(是に)六、十(七)

結果したまひしかは護法もちかつく事(六、十)

ゑすなりにけり(ナ)三

井上家旧藏弘法大師伝絵巻について

〔絵〕

其後即本院六、十(八)大師本院にかへりて供具をいとみととのへ

て六月上旬に胎藏界の灌頂をうけ七月上旬(給)六

旬に金剛界の灌頂をうく八月上旬に又傳法(ナシ)六、十

阿闍梨位の灌頂をうけ結ぶこの日五百僧の(ナシ)三

齋供をまうけてあまねく四衆にほと(達)六、十

こす青龍寺大興善寺の僧衆みな齋筵に(悉く)三、六、十

のそみて隨喜をなす和尚又つけてのたま(見)十(九)

はくわれいとけなかりし時はしめて三藏(見)十(九)

にまみえたてまつりき三藏ひとたひ見給て(六、十)哀(二〇)

のちひとへにあはれみて子のことくにし(竊に)六、十

たまひき内にまいり寺にかへり給にかけ(竊に)六、十

のことくにしてはなれたてまつらすつね(竊に)六、十

告曰く(密)六、十にのたまひきなんち秘藏の器ありゆめく

かるくする事なかれと兩部の大法秘密の(密)六、十

印契これによりてことくくまなひえたり(兼學する)三

自余の弟子もしは道もしは俗あるいは(兼學する)三

一部の大法をまなひあるいは一尊一印を(兼學する)三

えてつふさにつくしてかねならふ事なし(兼學する)三

いまこの岳瀆の恩を報したてまつらんと(三、六、十)

思ひ昊天きはまりなしわれこの土の化縁(三、六、十)

つきなんとすひさしくとまるへからす今(三、六、十)

兩部の大曼荼羅一百余部の金剛乘法(三、六、十)教

をよひ三藏傳付のものならひに供養の道(三、六、十)

具等ことくくなんちにたてまつるへしこふ(三、六、十)

本郷にかへりて海内に流傳せよわれわつ(三、六、十)

かになむちかきたらんことをかみみて命(たへなん)六、十(ナ)

のたらさらむ事をおそれいまはすな(シ)十(奥あることなし)二四(儀)十

はち授法ことむある事あり經像功をはり(シ)十

ぬはやく郷國にかへりて國家にたてまつり(シ)十

て天下に流布して蒼生の福をませしか(シ)十

らは四海やすく万民たのしまんこれすな(シ)十

はち佛恩を報し師徳を謝するなり國の(シ)十

ために忠なり家にきて孝なりゆめく(シ)十

こゝろをゆるにする事なかれとねんころに(シ)十

付屬教誡し給きこのゆへに小野僧都成尊(シ)十

後三条院東宮におはしまし時令旨をう(シ)十

け給はりて眞言要事をしるし申され(シ)十

し時眞言をつたふる家々不同なりといへとも(シ)十

東寺の一家大師の御流につきて諸家に(相承に)二四

すくれたる事十種の殊勝ありといへりその(相承に)二四

むねつふさにするにあたはす彼の文を(相承に)二四

たつねてしりぬへしされは天下の興復(相承に)二四

國家の安全ひとへに大師の伝法傳通(相承に)二四

にあるものなり(相承に)二四

〔絵〕

惠果和尚の御あひ弟子に順暁阿闍梨と申す人おはしきその弟子に玉堂寺の

三、六、十(其人大師の御受法を妨として申いはく)

僧珍賀と云人ありけり日本座主た

とひ聖人なりともこれ門徒にあらず

よろしく諸教を受學せしむへしな

むそ密教をさつけ給はんやと再三

いさめ申けりしかるあいた珍賀ゆめ

に四天王きたりてさまく降伏し

給と見る

三(朝におきていそき大師の御許に参て五鉢を六(朝にきていそき大師の御もとにまいりて十(朝に起て念大師の御許に参て五體を地に投地に投て三拜しなく其咎を謝申けり)五體を地になくて三拜して泣々其咎を謝申けり)て三拜し泣々そ其咎を謝申けり)

〔繪〕

注

- ① 十は「しれり」につくる
- ② 十は「長七八尺斗」につくる
- ③ 「はく」六ナシ
- ④ 「かといふ……雷のことし」まで三ナシ
- ⑤ 三は「たまひ」ナシ
- ⑥ 「時」三ナシ
- ⑦ 六は「無程」
- ⑧ 三、六、十「故院」につくる
- ⑨ 十は「したまふ」
- ⑩ 三は「真言の大祖」
- ⑪ 六は「忽」を「爰」につくる
- ⑫ 三は「ふくんでのたまはく」、六は「悦てのたまふ」、十は「悦てのたまはく」につくる
- ⑬ 六は「する」ナシ、十「する事」ナシ
- ⑭ 六、十は「已につきなんとす」につくる
- ⑮ 三は「法をさつけむとするに人なし」、十は「法を授とするに人なし汝」につくる
- ⑯ 三は「灌頂壇」につくる
- ⑰ 三は「其に」を入れる
- ⑱ 三は「其後」につくる
- ⑲ 「まみ」六ナシ
- ⑳ 十は「哀たまひき」につくる
- ㉑ 三は「これによて」につくる
- ㉒ 六は「きはまる事あたはず」につくる
- ㉓ 十は「絶なむとする事」につくる
- ㉔ 六は「うとむある事」、三は「事なし」につくる

- ㉕ 六は「ため忠なり」につくる
- ㉖ 十は「をひては」につくる
- ㉗ 六、十は「春宮」につくる
- ㉘ 三は「一家一師」、六は「一宗大師」につくる
- ㉙ 三、六、十は「一灌頂殊勝 二受學殊勝 三梵文殊勝 四相承殊勝 五誓言殊勝 六寶珠殊勝 七道具殊勝 八入定殊勝 九法則殊勝 十外護殊勝」を挿入す
- ㉚ 六は「当知」、十は「まさにしるへし」につくる
- ㉛ 三は「日本の座主」につくる
- ㉜ 六は「聖人なりと云とも門徒」、十は「聖人といふとも門徒」につくる